帰納法と演繹法：コナン君と理科の実験とシャーロック・ホームズとダーウィン

さて、帰納法と演繹法。

数学やロジカルシンキング、就活のケース問題集などで見かけた事があるでしょうが、私は今まで帰納法と演繹法の意味と使い方がさっぱり分かりませんでした。

しかし、この難解な論理学の用語を名探偵コナン君と理解の実験に置ける考え方に置き換える事によって、その意味と使い方が理解できましたので、今回はLife Chopperの皆様方にご紹介したいと思います。

まずは帰納法。

コナン君が事件に遭遇した時に、彼はまず何をするか？情報集めです。現場検証、遺体検証、第一発見者や事件に関わっているであろう人物達に聞き込みを行いますよね？

名探偵コナンを見ている我々は勝手に殺人事件である決めつけていますが、コナン君がまず行っているのは、そもそも殺人事件なのか？自殺なのか？事故なのか？と言う事を情報集めを通して推理しているわけです。

これが帰納法です。情報を集めて、仮説を立てて、結論を導き出す。コナン君の言葉で言い換えるならば、「不可能な物を除外していって残った物が…たとえどんなに信じられなくても…それが真相なんだ！！」

そして演繹法。

中学生の時の理科の実験を思い出して見て下さい。実験の前に先生に記録用紙に書かされませんでした？「この実験をしたらどうなると思う？」と言う事を。最初に「この実験をしたらこうなるんじゃないか？」と言う仮説を立てて、実際に実験で仮説が正しいかどうか検証をするわけです。

情報集めを行う前に、仮説を持ってから情報を集める。これが演繹法です。

難しい事ではないですよね？誰もが日々行っている事です。

さて、ここからが本題です。帰納法と演繹法のどっちが良いのか？どう使うのか？

シャーロック・ホームズの格言にあるのが「十分な情報集めを行わずに、仮説を立ててしまうと、その仮説を無理矢理に成り立たせるために情報を捻じ曲げてしまう」と言うように、情報集めはあらゆる情報を区別することなく、必要十分に集める必要があるわけです。

進化論で有名なチャールズ・ダーウィン氏は１８５９年に著書「種の起源」を発表する約２０年前には既に進化論を発表するのに十分な情報があったと言いますが、彼は進化論を確固たる理論にするために、調査と言う名の情報集めを続けだそうです。

その反面、ビジネスにはリーンスタートと言う考え方があります。仮説を立てて素早くそれを検証する、仮説検証を繰り返して、良いビジネスアイデアや製品に加える新たな機能を炙り出すと言うような。

と言うようにですね、恐らく大事なのは帰納法と演繹法を